

新任ご挨拶



附属大塚特別支援学校長
藤原義博

昨年度までの2年間、東京キャンパスにあります特別支援教育研究センター長を勤め、ようやく附属学校教育局や附属学校の在り方がわかり、センター長としての役割を果たせるかなと思っていたところに、あと1年を残して急遽、本年度より附属大塚特別支援学校長を勤めることになりました。転任が決まった時点では、うまく役目を果たすることができるかと少々不安な気持ちに陥りましたが、勤めて1ヶ月を迎えようとする今は、むしろ期待でいっぱいといった感じであります。

と申しますのも、学部を卒業後の3年間という短い期間ではありましたが、本学大学院に入学する以前に小学校教諭として勤めた経験があり、30年以上たった今になっても児童生徒と一緒に生活する学校という場に親しみを感じ、児童生徒の声と姿を見ることが日に日に楽しくなっております。

また、この15年間ほどは各地の知的障害特別支援学校の「授業づくり」に取り組んできましたが、学校長という立場になって見る本校の児童生徒の有り様と教師の力量から、さらに大きく発展できる可能性を感じております。

今後は、これまで多くの特別支援学校の実践から得た知見と成果を存分に生かし、本校の教師が児童生徒の可能性を見出し、将来につながる豊かな成長をはぐくむことできるように精一杯支援したいと念じています。どうぞ皆様方のご支援もいただけますようよろしくお願い申し上げます。

21年振りの現場復帰に当たって



附属久里浜特別支援学校長
宍戸和成

今から34年前、いわゆる“特教”を出て、附属聾学校に勤めました。その後、13年間小学部で聴覚障害の子供たちの教育に携わり、そのころの教え子は、今や社会人としてそれぞれの人生を送っています。私の方は、ひょんなことから文部省に入り、聴覚障害や言語障害を担当する調査官として11年間を過ごしました。その後、国立特殊教育総合研究所に移ったり文科省に戻ったりして、更に10年が経過し、この4月から筑波大学附属学校教育局にお世話になることになりました。週の大半は、三浦半島の横須賀市にある附属久里浜特別支援学校でその経営に携わっています。本校は、海の傍にあり、房総の山々や大島が眺められ、自然に恵まれた環境にあります。

自閉症を併せた子供たちの学校ですが、登校時に決まって、同じ長いすに座り、しばらく先生方の様子を伺ってから、ようやく上履きに履き替え、教室に向かう新入生。時々、上履きを放り投げ、取ってくれるかどうか先生の様子を探っている上級生など、個々の子供が様々な行動を見せてくれます。障害は異なりますが、これらは私が聾学校で味わったこととオーバーラップしているように思われます。なぜなら、言葉で表現できない、しない子供たちは、周囲の者が場面や文脈、しぐさ、動き、家庭での様子など様々な情報を統合して、その心を探る必要があるからです。もちろん、聴覚障害と自閉症では、障害の要因が異なります。しかし、教育としてアプローチする際には、一方の経験を他方に応用することも可能であると思います。当然、そこには新たな創意工夫が必要になります。

そんなことを考えながら、日々子供たちに接している毎日です。どうぞよろしくお願いいたします。

新任校長挨拶

平成21年度 附属学校教育局 研究発表会
附属学校教育局 教授 熊谷恵子



篠原吉徳教授

今回は、「学び方、学ばせ方についての提案—附属学校の実践から—」というテーマで行われました。

1. プロジェクト研究
江口勇治教授を中心とする「パブリックリテラシーの学習のあり方に関する研究」、篠原吉徳教授を中心とする「交流・共同学習」についての発表がありました。

前者では、江口教授が、現在の教科教育の中で法教育がどのように位置づくか、具体的に、理科の実験（荘司先生（附属中学校）、関谷先生（附属中学校））、体育（大津先生（附属坂戸高校））という教科学習の中での取り上げ方について発表がありました。法教育というのは、グループへの帰属意識や集団の中のルールをわきまえた個人の取るべき行動の選択で、さまざまな教科で取り入れる必要があることが理解できました。また後者では、附属坂戸高校と附属久里浜特別支援学校という2つの地理的にもっとも離れた学校をスカイプ画像で結んで行った交流教育実践の研究の発表が熊倉先生（附属坂戸高校）、西川先生（附属久里浜特別支援学校）の双方からなされ、交流の深まりを考えさせられました。

2. 四校研「筑波大学と附属三校（小中高）の研究」報告
荘司先生から、教科ごとに行われている四校研のこれまでの活動について概略を説明していただき、塚田先生（教育学系教授、小学校校長）から、大学から見た四校研についてのコメントがありました。教科を代表して、算数・数学について細水先生（附属小学校）、国語について飯田先生（附属中学校）、英語について山本先生（附属高校）から、小中高の系統性のある教科研究について報告がありました。

3. 講演「オリンピック教育」
阿部教育長から、「オリンピック教育とは、競技者の育成に関わるものだけではなく、言語が異なっても、スポーツという万国共通のもので、世界の人をつなげるという崇高な思想のもとに作られたもの」であることを教えられました。これこそ、他の大学ではできない附属学校をもつ総合大学である筑波大学が取り組める教育ではないかというお話がありました。

平成21年度 附属学校教育局 春期研修会
附属学校教育局 教授 熊谷恵子

平成22年3月26日金曜日、小雨降る寒いあいにくの天気でしたが、附属学校教育局の春季研修会が行われました。今回の講師は、谷川彰英先生（前副学長・前教育長）と北原保雄先生（元学長）でした。

講演「地名に隠された人間のドラマ」は、谷川先生が興味をもたれている地名についての話でした。地名とは「自然に発生した地名は始めから社会の暗黙の議決を経ている」ので、本来は、地名から地域の歴史を探ることができ、子どものアイデンティティを育てることもなるものですが、「住居表示に関する法律」によって「〇〇3-5-1」とそろえたことで、道を挟んで顔の見えるお付き合いの生活空間を、異なる地名で区切ってしまったなどの話を聞きました。

講演「新語の氾濫」では、北原先生に、問題のある日本語が氾濫していること、新しい言葉が誤りから生まれたり、故意に作られたりしている現状があることを具体的な例をまじえて解説してくれました。若者が作った新語もあり、短時間で消えてしまうものも多々ありますが、「KY（空気が読めない）」などは、今後も日本語として定着していくのではないかという話でした。

2つの講演の間には、演奏「星に願いを、虹の彼方に、マンマミーヤなど」という題目で、大塚特別支援学校高等部生徒の演奏とパフォーマンスが行われました。紹介や司会進行も生徒が行い、演奏も、ハンドベルなどを使って集団で1つの曲を作られ、曲ごとにそれぞれの子どもの立ち位置が変化するなど難しいパフォーマンスもありましたが、みごとに行われ、会場が明るい雰囲気と感動に包まれました。



元学長・北原保雄先生

前副学長・前教育長 谷川彰英先生

平成21年度 附属学校教育局 附属学校教育局 教授
新任教員交流会について 江口勇治

昨年度に筑波大学の附属学校に赴任された先生方の交流会が、例年通り開催されました。

- ・日時 平成22年2月16日 15時以降、懇親会まで。
- ・内容の概略 ①阿部生雄附属学校教育局教育長講話「附属学校を取り巻く現状と課題」、②篠原吉徳研修委員会委員長講話「研修会の取り組みと現状」、③四グループ別交流会での討議等

多くの附属を抱える本学ならではの交流会は、新任の研修会をかねつつ、お互いのこれまでの教師としての取り組みの紹介等を附属学校同士で共有する試みであり、フレッシュな先生方の参加を得て、和やかに開催されました。当日は報告者も十人あまりの小グループの講師をつとめ、各附属での新任教育の日常と悩みの一部を知ることができ貴重な経験を積み重ねて頂きました。

